

## 他者性、開放性、そして拒絶 —ユダヤの文脈における—

エステル・ベンバッサ (Esther Benbassa)

西洋においてユダヤ人は他者であり、それも、幾分親密な他者である<sup>1)</sup>。そうであるのは第一に、ヨーロッパ大陸に間断なくユダヤ人コミュニティが存在してきたことによる。ときとしてそれらのコミュニティは、幾世紀にもわたって驚くべき安定性を示してきた。さらに、ヨーロッパ文明が、ユダヤ人の中に現れた自らの鏡像を凝視することで、ある程度まで自己を構築しなければならなかったこともその理由である。壮麗なキリスト教は、ユダヤ人という他者から生まれると同時に、それに対照することで自身のアイデンティティを構築した。最後に、ユダヤ人が親密な他者であることには次の理由がある。すなわち、大西洋の両岸で、西洋のユダヤ人は近代の到来と発展にとって十全にその役割を果たしたのであったが、続く時代に、それは時に入り組んではいるが、しかし解放と同化の決定的な通路となったからである。他者としてのユダヤ人に向けた西洋の眼差し——それは拒絶する眼差しであり、それでもなお魅了された羨望の眼差し、そしてまた賞賛の眼差しでもあった。さらにそうした眼差しは、ユダヤ人が自分自身に向ける眼差しを形作ってゆく際に、それに大きく関係していたのである。

しかしながら、なおも残る事実、ユダヤ人が単純に西洋にとっての他者であったわけではないということである。あるいは、ついに今日に至ってそうってしまったように、単純にある種のイスラームにとっての他者であるわけでもない。ユダヤ人は主体なのである。そしてどの人間社会とも同じように、ユダヤ人社会もまた、それを構築し定義付ける作業のために他者のイメージを措定した。そのために用いられたのが、非ユダヤ人の他者やユダヤ人の他者である。この他者のイメージに関する無数の改変や改造が、それらの装いのもとに証言するのは、歴史全体を通じたユダヤ人自身のアイデンティティの変化とその意義深い流動性である。彼らにとっての他者のイメージをユダヤ人に尋ねるならば、彼らが抱いている彼ら自身のイメージを直ちに発見することになるだろう。社会文化的構成物である他者の姿の多義性は、それを作り出す者の多義性に留意させる。というのも、他者というものは、常にもう一人の自己でもあるからである。つまり、他者とは自己を映す鏡であり、また〔自己を飾るための〕金属箔でもある。これはいささか陳腐な常套句であるが、ひょっとすると次のような集団の場合においては、かえって大きな説得力を保っているかもしれない。すなわち、それは歴史的に

見て、離散したマイノリティーやそのために弱者であった集団であり、そしてその結果として、自らが暮らす社会のマジョリティーによって魅了されると同時に、脅かされてもいるといった二つの感情を自然と抱くような傾向を持つ集団である。

ユダヤ文化におけるモーセ五書の地位は、こうした多義性を示す好例である。そもそも、モーセ五書とは何であろうか。それは、その周囲にユダヤ人コミュニティーが寄り集ってきたところのテキストである。彼らはこのテキストの中で自己自身を認識し、それを彼らの礼拝の中心に据える。週ごとに決まってこのテキストが章を追って読まれるが、それは儀礼によって守られていることである。年が終わると同時に読み終わり、そしてもう一度「初めから」読み始められる——それも無際限に。したがって、モーセ五書はそれ自体で完結したテキストであり、果てしなく続くその螺旋はこの集団を包み込み、保護するのである。しかし、モーセ五書は他者のテキストでもある。つまり、キリスト教がモーセ五書を、神託の第一形態として認めることを決定して以来、たとえそれを単に第一形態としてのみ認め、その読解の鍵をただ新約聖書の中にのみ見出だすにせよ、キリスト教が用いる旧約聖書の核を形成してきたのである。

またしても、モーセ五書とは何かということになる。それはモーセの書き記したまわったとき他者の言葉、つまり神の言葉の記録である。ある意味で、神は契約を結んだその瞬間に、イスラエルの民を創り出したと言える。アダムとノアとともに人類の歴史が始まり、アブラハムとともに、あらゆる他者と区別されるひとつの民の歴史が始まる。それは苦難を引き起こすものであるが、そのことでこの民は徐々に以下の事柄を実現していった。すなわち、彼らは単なる人間といった無差別性から自身を引き離し、他者から自身を分離し、ありとあらゆる点で、エジプトや奴隷の身分といったものに離縁を告げることで、自身のアイデンティティを引き受けるということである。ある事柄を正しいと判断し、自己と他者の区別と同じように、許されていることと禁じられていることの区別を成文化するのが、最終的には律法のテキストなのである。

しかし同時に、モーセ五書は未完了の事柄に関する物語でもある。なぜなら、すべての事柄は約束の地の戸口で止まっているからである。また、主の代弁者であり書記官であるモーセ自身が荒れ野で死んだので、彼がその任務を十全に果たしたのかどうかということもことによると不確かであるが、いずれにせよ、彼がそこに参与することを許されなかった未来的な偉業はことごとく描かれなかったからである。モーセ五書の律法は鉄の掟や、明瞭な指示ではない。この律法においては、他者との分離の要求と倫理上の要求とがその肩を触れ合わせている。つまり、他者は誘惑者であり危険な者であるが、そればかりではなく、共感の対象や、真に平等な正義の享受者でもあるということである。

最後に指摘したいのは、モーセ五書というテキストは、注解者たちの無数の世代の眼前に、あたかも難攻不落の要塞のように立ち現れたということである。それは不明瞭で矛盾した、ときに衝撃的なテキストである。このテキストは、まったくもって実際に私たちの手の中にありはするが、それにもかかわらず、恐ろしいほどに他者としてその姿を現す。幾世紀にもわたって、批評家たちはそのテキストを再び自身のものとするために、あるいは理解可能で受容可能な新たな意味を探りだすべく、あらゆる方法を用いてその言葉を翻訳するために、汗と血と涙を流してきた。このテキストは、古代の思想家にも近代の思想家にも解釈上の大胆さを示すことを求めてきたのであり、ただそうした大胆さのみがそのテキストを救うことができるのである。

ここでは、現代の事情に思いを致すだけで十分である。ヒューマニスト、すなわち普遍主義的なユダヤの思想家は、偏狭な個別主義の誘惑に服すことを拒絶するが、選びの原理 (the principle of Election)、すなわちユダヤ人の経験の特異性と価値を放棄することはなかった。ユダヤのフェミニストはこのテキストが有する「男性優位主義 machismo」に立ち向かったし、ユダヤ人の同性愛者でさえも、その「同性愛嫌悪 homophobia」を制限し中和しようと試みた。世俗的ユダヤ人のナショナリズムが政治的な憲章と歴史的権利を示す根拠へと変化させたテキストから、我々は今日、実際に何を導き出すべきなのか。天地創造の歴史と律法の宣言という両点において、女性を服従と従属のもとに置いてきたテキストから、我々は何を導き出すべきなのか。「忌まわしい行為」と看做される男性間の性的関係に死刑を課すようなテキストと、我々はどのような関係を持つべきなのだろうか。

しかしながら、根本のところでは聖書はまったく重要ではない。重要なのは読み手の質である。過去と現在の生きたユダヤ人たちは、そのディスコースの壁の中で、次のような突破口を開くべく努力をした。つまり、そこを通過して他者が再び内へと入ることが可能となり、生命が再び流れ出す突破口である。そしてそのことは、このテキストの無味乾燥を潤し、年とともに頑冥固陋になって、その固さゆえに脆くなった言葉に再び息吹を与えるために行われてきたのである。他者は依然としてこのテキストの一部となっている。というのも、好もうと好まざると、他者は依然として生命の一部となっているからである。そこに他者を求めるものは、他者を見出すだろう。そして他者を見出すならば、そこに自己自身をも見出すだろう。実際に、他者の姿は、それが鏡であろうが金属箔であろうが、常に多義性から現れ出てくるものである。なぜなら、多義性は決定的で乗り越えることのできない相互依存の象徴だからであり、そして、私を私であるところのものにし、十全な自己実現を可能にするのは、最終的には他者だからである。根本的に、他であるところのもの (the other) なしには、ひとつのもの (the one) であるこ

とはできない。書物はその読者を必要とする。テキストは生命を必要とする。そして、ユダヤ人はその他者を必要とするのである。それでは次に、このテキストに問い掛けつつ、歴史の——換言するならば、生命の——教訓とともに、それを肥沃なものとしてみよう。ユダヤ人の歴史物語（his-story）においてテキストが物語るのは、単にユダヤ人だけではなく、ユダヤ人にとっての他者の事柄でもある。

後の時代に預言者に受け入れられた申命記の伝統の中では、神とイスラエルとの契約はユダヤ教の基礎的なパラダイムである。ユダヤの民の上に滅亡の危機が降り注ぐとき、それは、義務の履行に怠惰な神が、彼らを見捨てたことを理由としているのでは決してない。あるいは、彼らが世界の他の諸力との競合において失墜したことで決してない。神は現存しており、彼らの滅亡はイスラエルの罪に相応しい罰と考えられるべきである。彼らに負わされる不幸が罪の贖いを保証し、残存した者たちが神との関係を再構築することを許されるという点で、実際に、この罰は彼らに対する神の絶え間ない関心の表現にまでなったのである。彼らの失墜の悲劇の中では、イスラエルの敵は、単にイスラエルの不正を罰するために神に選ばれた媒介者に過ぎない。そうであるから、その目的を果たしてしまえば、その敵もまた打ち果たされてしまう。こうした敵の与える懲罰はよりいっそう過酷なものであり、神の計画の境界線を越えて、必要以上にイスラエルを容赦なく罰するところまで行き着いてしまうからである。このように、神と苦しむ民との反目は、それ以前に神に惑わされた敵の存在によって媒介されている。それから先は、この敵は、イスラエルの反感の矢面に立つために作り出された明確な人物像として、名乗りを上げることになる。イスラエルとその神の和解を可能にするのが、まさに敵の存在なのである。

しかしながら、イスラエルと神の両者には、それとは別の根本的な敵がいる。それはこの民の存在そのものに対して、脅威と恐怖を引き起こす敵である。エサウの孫であるアマレクは、そうした敵の原型であり、それを完全かつ象徴的に具現化したものである。アマレクは、紅海渡渉後に初めて遭遇した敵である。ヨシュアは彼に戦争をしかけ、モーセの祝福をもって、「剣にかけて」(Exodus 17:13.) それを打ち破った。そして永遠なる神はモーセに次のように告げた。「このことを文書に書き記して記念とし、また、ヨシュアに読み聞かせよ。『わたしは、アマレクの記憶を天の下から完全にぬぐい去る』と」(Exodus 17:14.)。しかし、アマレクは決して滅びなかった。彼の行った不誠実な行いの記憶は、ユダヤ人の意識に永久に付き纏う。民がファラオの支配下からやっとのことで離れ出て、疲労困憊の極地にあるときに、アマレクは後方からイスラエルを攻め、しんがりにいた落伍者に襲撃を仕掛けた。アマレクは、彼としては神を畏れ

ない。彼は永遠なる神の王座を襲いさえるのであるから、彼に対する戦争は常に、つまり「世代から世代にわたって」(Exodus 17:16.) 行われ続けるのである。彼の名はこうしてひとつのシンボルとなる。アマレク、それは抜きん出た敵である、と。

ペルシャおよびメディアの王、アハシェエロスの宰相であったハマンは、反セム主義的な迫害者の典型であり、聖書を典拠とすれば、離散したユダヤ人住民に対し大規模な根絶計画を企てた初めての人物である。幸いなことに、モルデカイと、やがてアハシェエロスの妃となったモルデカイの従姉妹であるエステルによって、彼の計画は頓挫した。ハマンその人はアマレクの末裔である (Esther 3:1, I Samuel 15:8.)。エズラ記の物語るこの事件の年代決定と史実的現実性が、仮に議論の余地のある事柄だとしても、この事件は、ピューリム祭として知られるユダヤ世界の祝日の中で毎年記念されている。後に、多くのユダヤ人コミュニティはその土地と関係のあるピューリム祭を設けたが、それは、奇跡的にも救われたと彼らが信じている、他の出来事の記憶を守ることを目的としている。ピューリム祭は、危機と常に開かれている救済の可能性の両者を喚起させる流浪の民の祝日である。そうした祝祭には決まってある行事を行うことが定められており、それは奇妙なことにカニバリズムの形式を採っており、ハマンの「耳」や「ポケット (彼の被っていた三角帽)」のような特別なペーストリー菓子を準備するのである。敵は象徴的に飲み下されることになるが、それによって敵を無害なものに変え、彼から勝ち得た勝利を確認するわけである。それから後は、敵は内部にいることになり、外部にはいなくなる。

しかし、イスラエルを破滅させようと目論む敵が存在するだけではない。彼らを拒絶し、投獄したり、屈辱を与えたりするものもいる。そうした敵の誰もが、ユダヤ人を他者として拒絶する。つまり、敵は拒絶する他者なのである。

キリスト教世界において、こうした拒絶は初めのうちは神学上の問題であった。ユダヤ人はイエスをメシアと承認することも、イエスの神性を認めることもしない人々であった。ユダヤ人がキリスト教に改宗することは彼らの受容への道を切り拓くが、それはユダヤ教徒が消滅するという代償を払うことによるのみ可能なことである。付言しておかなければならないのは、彼らの消滅が遍く求められたわけではないということである。というのも、聖書の敬虔な守護者として知られるユダヤ教徒の存在と存続が、キリスト教信仰の正しさの証明と看做されたからである。ユダヤ教徒がそこに居続けなければならなかった劣った地位とは、彼らの無知蒙昧に対する罰でもあり、またキリストの福音が真正であることのしるしでもあった。しかし、キリスト教が急速に広まっていくのと連動して、ユダヤ人が徐々に周縁に押しやられていくにつれ、彼らは悪魔のように看做されるようになってゆく。このような悪魔視は、憎悪の感情を結晶化し、それを

高尚にしたものであるが、彼らが次第にその標的になっていったのである。やがてユダヤ人は悪魔の化身となった。つまり、それに近づき過ぎると墮落する恐れのある悪魔であり、それに抗するためには神の力のすべてを結集することが求められた。ユダヤ人はいまや、悪魔的な忌むべき人間となった。キリスト教徒は彼らに烙印を押し、排斥し放逐すべく努力するようになった。当然のことながら、放浪するユダヤ人という神話的な像は、「定住型」のキリスト教徒の想像の中で生じたものである。つまり、キリストに敵対する罪悪に加担したために、新たなカインであるユダヤの民のすべてに与えられた罰が、放浪だということである。この民はいまや連帯とルーツとを欠いており、この欠如という美德によって存在している。この神話は繰り返し形を変えながら、19世紀末に至るまで存続してきた。近代の放浪するユダヤ人は、様々に異なった符号を付与されつつ、人々の心の中に漂い続けた。彼らは国際的なユダヤ人、新奇なユダヤ人、他の土地からやってきたユダヤ人、近代のパーリア（浮浪者）といったものに変質させられ、反セム主義的な集中砲火の標的となることもしばしば生じた。こうして、ユダヤ人の放浪は、彼らの存在と同本質のものと看做されるようになった。つまり、放浪はこの「人種」の命運だということである。

中世の終わりからイベリア地方を支配し始めた純血法は、純血のキリスト教徒と他者との新たな種類の差別を設けた。後者はムーア人、異教徒、ユダヤ人の系統を引くものであり、その出自の不純さによって前者から永久に区分された。[このためキリスト教徒にとって]理想とされる社会においては、最も卑しい役割の幾つかでさえも、いまや純血のキリスト教徒によって果たされなければならない。血統が選択上の新たな基準となったのである。また、新たにキリスト教徒となった者は、永遠にその血筋の虜となった。彼らが、改宗者——14世紀以降、そのときの記憶はスペイン人の頭から離れることがないのであるが——の子供や孫、あるいは曾孫であったとしても、また、彼らがキリスト教の指針を——他には選択肢がないと考えたからであるが——選んだのだとしても、彼らは皆、不純というカテゴリーに分類されたのである。不純なものは排斥され、周縁に追いやられ、社会的な領域から追い払われた。19世紀に時代が下るまで、純粹と不純に関する強迫観念は長らえた。「血統」に基いて、こうした選択を決定する規則と法規の支配は、ポルトガルでは1773年まで、スペインでは1860年まで廃止されることはなかったのである。

中世の反ユダヤ主義に影響を受けつつ、近代の反セム主義は、今や進歩という競争に従事することになったヨーロッパ中に、あたかも伝染病のように広まった。近代のイメージネーションの中でも、ユダヤ人は現存するあらゆる犯罪を合体させるもの、その人格自体で脅威となるものと認識され続けた。つまり、過渡期にある社会を襲うあらゆる間

題の最終的な原因と看做されたのである。そうした社会は、緊張関係という重荷をユダヤ人に押し付けることで、そこから抜け出ようと努めたわけである。ユダヤ人は社会的変化によって発生した攻撃的なエネルギーの標的となり、塵屑の山に取り残されたすべての人々の憤慨が向かう焦点となった。強大で広域にわたるそれらの反ユダヤ主義的感覚は、新たな秩序を熱望するイデオロギーの手の中で、容易に政治的な武器へと変化した。これはナチスが実施した手段である。絶対化された他者としてのユダヤ人は、すぐさま人種的なそれへと衣替えをした。18世紀および19世紀の「科学」理論の多くが、ユダヤ人の「黒さ」を議論の主題とした。ユダヤ人の色彩は、人種的劣等生と不健全な本性を漏洩するものとなった。彼らは黒い、それ故に抜きん出た他者なのである。それならば、ユダヤ人のユダヤ性は疾病の類なのだろうか。純粹と不純という象徴的な差別から、黒色と白色、あるいは健全と不健全といった身体的、衛生学的な差別への変化は、ここで生じたと考えられなければならない。それ以降、白色は純粹であり、黒色は不純となった。当然のことながら、「不潔」であるために、ユダヤ人は拒絶の感覚を呼び起こした。黒色であることは、同時に醜悪であることも意味した。ユダヤ人の黒さは、彼らがいかに相違しているかということの符号であった。この点から、ヨーロッパ人が横柄にも彼らの優越性を公言していた植民地主義の最盛期であったこの時、結局のところ、ユダヤ人はそうしたヨーロッパ人よりもアフリカ人に近かったのではないだろうか。また、ユダヤ人の特徴である黒さに付け加えられたのが、彼らの肉体に刻み込まれた諸々の指標であり、その顔立ちの中に見て取れるもの、特に有名な「ユダヤ鼻」であった。多くのユダヤ人は敵の作り出したイメージに囚われて、実際にその鼻を——外科手術によって！——改良することを望んだ。社会は越境不可能な境界線を彼らに割り当てたが、鼻を改良することで、その社会における彼らの地位を改善できると想像したわけである。

600万人のユダヤ人虐殺を目の当たりにした戦争の直後、1946年に出版された『反セム主義者のポートレート』の中で、ジャン・ポール・サルトルその人は、あるユダヤ人の友人を描写している。その際にサルトルが用いる語彙は、彼が宣戦を布告したまさにその反セム主義者も受け入れたであろうものなのである。「ナチ政権の初期段階の時にベルリンに住んでいた頃、私には二人のフランス人の友達がいた。そのうちの一人がユダヤ人であった。ユダヤ人は『セム人の極端な類型』を代表している。つまり、鷲鼻と突き出た耳、厚い口唇である」<sup>2)</sup>。サルトルは次の事柄を付言する。「しかしながら、あらゆるユダヤ人が何らかの共通した身体的特色をもっていることを認めたとしても、ごく漠然とした類似による以外、彼らの性格にも共通の特徴があるという結論をそこから導き出すことはできないだろう」<sup>3)</sup>。「華奢なわし鼻と突出した耳」<sup>4)</sup>——サルトルの意

図がまさにそうした特徴を戯画化して貶めるのを避けることにあったとしても、それらは彼にとってユダヤ人の特徴に見えてしまうわけである。サルトルが彼の描くユダヤ人に微塵も敵意を示していないことは、ほとんど疑う余地のないところであるが、それにしても奇妙なことに、その知識人が生み出す叙述には、解剖学上の他者としてのユダヤ人が登場するのである。

それならば、ユダヤ性とは永久に身体に刻み込まれたものであり、その結果、自身の起源を消化しようが否定しようが、消去不可能なものはそもそも消すことができないといったことになるのであろうか。ユダヤ人の厚い口唇が、必然的に彼らを西洋から追放し、秘密裏にアフリカへと近づけさせたとも言うのであろうか。ユダヤ人は別の場所からやってきた民であり、別人種の民であった。したがって、彼らの文化が幻想を作り出したとは言えるかもしれないが、それが彼らの容貌を作り出したわけではない。そうであるからこそ、大戦と占領中にユダヤ人の身体的特質を嘲笑することで彼らに汚名を着せてきた反セム主義的な叙述と戯画とともに、19世紀の人種的カテゴリーと人種法が過去のものとなった後でも、即座に起こった争いとそれがもたらした災難に際して、ユダヤ人は他者から向けられた眼差しの中で、以前の身体的特徴とは異なった表徴を引き続き提示することになったのである。戯画化されるまでに他者としての刻印を付された結果、ユダヤ人は彼ら自身にとってかけ離れたものとなった。それ故に、サルトルは以下のように続ける。「反セム主義を引き起こすのは、ユダヤ人の特徴ではない。……逆に、反セム主義がユダヤ人を作り出すのである」<sup>5)</sup>。ユダヤ人のユダヤ性はまさに、他者の所産に他ならない。それは、ユダヤ人のアイデンティティーを究極的に否定することである。そして、彼らは今や、他者の眼差しに完全に依存しているのである。彼ら自身の存在を完全に否定することで彼らを存在させる——そのようなところにまで行き着いた、承認を拒む眼差しにである。

遊離している反面で判然としないような他者の役割に置かれることで、ユダヤ人もまた彼らにとっての他者、すなわち「非ユダヤ人」を想像するようになった。それは、洗練されたフランス語においては *Gentile* と呼ばれた。この言葉は幾分当たり障りのない表現であり、ゴーイ (*goy*) という言葉に充てられたものである。聖書の中で、ゴーイという言葉は単に「民」や「国民」といったものを意味しており、体系的ではないにせよ、しばしば「イスラエル」との対照的区別の中で用いられている。ラビの語法においては、この用語はすべての非ユダヤ人に言及する際に登場しており、そのために、ゴーヤ (*goya*) という女性形の単語も用いられるようになった。この言葉の使用法には、軽蔑的で幾分友好的ではない言外の意味が備わっていた。当然のことながら、ゴーイはそこかしこに存在する。さらに、ユダヤ人の集団とゴーイとの関係が、反セム主義の集団

とユダヤ人との関係とまったく同じものでないことは明らかである。ゴーイには積極的な役割が割り当てられることさえあったのである。したがって、伝統的なユダヤ社会には、敵意のない不可欠な他者に関して、よく知られた日常的な具体例が数多く存在している。例えば、シャッパート・ゴーイ (shabes goy)<sup>6)</sup> というものが存在した。ユダヤ人は週毎の安息日のあいだ中、いかなるときも自分自身では特定の仕事——例えば、照明や暖房の着火あるいは消火——をこなすことを禁じられていたが、中欧や東欧では、それらの仕事を行うように彼らに依頼する習慣があった。また、現在と同様に当時も、正統派ユダヤ教徒には、過ぎ越しの祭りが終わるまで口にすることを禁じられている食物、あるいは所有することを禁じられている食物をすべて、過ぎ越しの祭りの前日に売り渡す習慣があったが、その買い手となる非ユダヤ人が存在した。もちろん、彼らに売り渡した翌週には、それらの食物を買い戻すわけである。さらに、この場合はムスリムであるが、伝統的にマグレブ地方では、非ユダヤ人がユダヤ人の隣人に、過ぎ越しの祭りの後に食する最初の醗酵した食事 (パン) を届けていた。それ故に彼らは、極めて人気の高いミムナの祝祭<sup>7)</sup> が始まることを告げ知らせるしるしとなっていた。このように他者は禁忌の領域に帰属させられていたが、同時にユダヤ人が律法違反を避けることを可能としていた。彼らはユダヤ人のユダヤ性を強固なものとし、ユダヤ人が異なる者との同盟関係を存続させつつも、いつもとまったく同じように振舞いながら、その相違を公にすることを可能としていたのである。

こうした非ユダヤ人としての他者の女性版がゴーヤである。この場合は今までとは逆に、矛盾に満ちた空想が生じた。イディッシュ語では、彼女たちは shikse と呼ばれるようになった。それは禁忌の対象ではあるが魅惑的な女性であり、厳密な正統派の立場からすれば、その子供はユダヤ人の系統の継承性を保証できる存在ではない。shikse はヘブライ語の shekets に由来する言葉である。聖書ヘブライ語において、この言葉は「忌まわしいもの」を意味しており、不浄や汚れを連想させる。しかし、shikse は誘惑者でもある。つまり、ユダヤ人の想像力は、禁忌とされているものの魅惑のすべてを兼ね備える最も妖艶な魅力を、どうにかして彼女たちに設えようとしたのである。他ならぬこの他者は、満たされることのない欲望である。この場合に限って、彼女は非ユダヤ人が理解していたユダヤ人女性と奇妙に類似している。ユダヤ人女性もまた強烈な魅力を持っており、夢想された恐るべき他者の在り様であった。キリスト教徒の芸術家の作品の中で、彼女たちは聖書に登場する人物像として具体化されている。誘惑する女としてのエバ、士師であるデボラ、冷酷なユディト、血に飢えたサロメなどである。それらのすべては、欲望され、近づき難く、恐れられた女性の人物描写である。文学作品もまた、ユダヤ人女性にそうした評価を与えた。19世紀においても、引き続き彼女たちは誘

惑の力を小説の中で発揮した。その中で彼女たちは、情婦や売春婦のような、結婚の対象とはならないが欲望を煽る類の女性として、そのようにして、禁じられた快樂の方法では得られない居心地の良さに無感覚になってしまっているブルジョア家庭を描き出す女性として登場する。これらのユダヤ人女性は東方諸国と結びつけて想像されている。それは、あらゆる快樂や夢が許されているような想像上の場所であり、そうした自由を作り出すことは、遠方に対するエキソティシズムのなせる業なのである。

他者の在り様を屈折させる方法に限りはない。キリスト教世界でゴーイが抜きん出た他者の姿を採っていたとしたら、イスラーム世界においては、アラブ人あるいはムスリムが同様の地位を享受していた。ここでもまた、色彩が他者の立つ位置を指し示している。オスマン帝国では、トルコ系ムスリムはその名前をイスラームの色彩からとっていた。緑色 (vedre) は、スペインのユダヤ人家庭の中で密かに、アラブ人を意味する色彩であった。それでは、彼らはなお同胞として、人間として、もう一人の自分として理解されていたのであろうか。実際は、彼らは別の色彩をあてがわれていた。アラブ人に関しては、トルコと後のイスラエルの両者において、黒色の符号のもとに置かれていたのである。西欧の非ユダヤ人にとってユダヤ人は黒色であったが、セファルディム (スペイン系ユダヤ人) はアシュケナジム (ドイツおよび東欧のユダヤ人) にとって黒色であった。そして、ユダヤ人にとって、アラブ人もまた黒色であった。黒という色彩は、その色彩を符号された者を人間の領域から引き離し、外見に合わせて事物と本性とを分類するようなものの見方や外観、想像へと沈み込ませようとする。多民族から構成されるオスマン帝国では、非ムスリムコミュニティのあいだには多様な緊張関係が存在していた。そこではアルメニア人でさえも動物世界を連想させるような名前が与えられており、ネズミ (ratons) と呼ばれていた。それとは別のマイノリティーであるギリシア人は、ユダヤ人と経済活動を巡って激しく競合していたので、「決して微笑まない民族」と呼ばれていた。ギリシア人には、ヒトを人間たらしめる微笑みが欠如しているというわけである。

シオニズム運動の初期段階でパレスチナに上陸した先駆者は、長らく神話的な地位を保持していた土地に順応しようとした。彼らは、その土地がより十全に彼ら自身の一部となるように、その土地を耕した。しかし、その土地の者となるためには、さらに原住民の——この場合は、遊牧民であるベドウィンの——習慣や身なりに合わせなければならなかった。このとき、他者は吸収されたのだろう。そうであるから、ロシア系ユダヤ人で、そのうえ知的な若者が現地 [パレスチナ] の装束を身にまとっている姿が直ちに散見されるようになったのである。その時代の写真は、今日では想像もつかないような装束を着飾った彼らの姿を映し出している。さらに、彼らの模倣への情熱は留まるとこ

ろを知らなかった。彼らは、手本とする人々の食事を、懸命に食そうと試みた。したがって、ヘブライ・アイデンティティーの（再）構築は、逆説的なことに、他者のアイデンティティー——あるいは、いずれにしても彼らのアイデンティティーに見えたもの——を模倣することによって進められたのである。この場合は、ベドウィンが他者であった。

それとは対照的に、政治的なシオニズム運動の創設者にとって、彼らが熱望した土地に遥か昔から住んでいた定住型のアラブ人は、常に重要なわけではなかった。彼らは決してアラブ人に目を配ることはなかった。目を配ることを拒絶したのである。シオニストの企図が進むにつれて、両民族間の緊張関係は徐々に高まっていった。1948年のイスラエル建国と1967年のアラブの敗北は、敗北し支配されたアラブ人と征服者であるユダヤ人との間に果てしなく広がる敵意という溝を深めたにすぎなかった。イスラエル側については、1973年のヨム・キプール [第4次中東戦争] によって、この紛争に賭されているのが、他ならぬ彼らの国家の存亡であるという見解が強化された。年を追うごとに、同じ土地に定住する両民族はよりいっそうお互いに不仲になっていった。彼らは相互に敵であり侵入者であった。この土地に生きるという彼らに共通する欲求に限って言えば、両者は一致していたのではあるが。

まさしくこの点において、アマレクが再び登場することとなった。多くの右派のイスラエル人の言説の中では、アラブ人は新たなアマレクである。不可視の他者は完全な敵となった。それは彼らを粉砕しようと企む敵であり、決して歩み寄ることのできない者である。この瞬間から、特定の人々の見解の間で、抑えがたい憎しみが総力戦の原理を正当化するようになる。つまり、アマレクに対する——すなわち、アラブ人に対する——戦争であるがために、それは当然かつ必要な戦争だということである (*milhemet mitsva*)。2000年10月以降、第二次インティファダは、長きにわたる一連の殺人攻撃と残忍な報復行為を引き起こし、両者の側に破壊と荒廃をもたらした。相互に他者の合法性を否認した数十年の間に、他者のまったき現存は認容不可能なものへと変質してしまった。他者は、破壊の根源的な脅威以外の何ものでもない。他者はそれ自身、破壊されなければならないのである。この紛争にかかわる両集団は、代わる代わる、殺人者とその被害者の衣装をまとうている。実際のところ、メディアはこうした倒錯的な暴力の連鎖を説明できていない。中東では、このように明らかに他者の倫理を決定的に棄却してしまう状態から回復することが、大変困難となっているのだろう。他者に対する憎しみがこのように熾烈になると、それは明らかに自滅的なものとなる。このことは、自己の命とともに他者の命を生贄とするテロリストの行為において明らかである。なかなか認めづらいことではあるが、ある種のイスラエル民族統一主義においてもなお、それは

疑う余地のないことである。他者は真正な同胞である。この認識からしか、平和を育むことはできない。真の平和とは他者との和解であり、自己との和解でもある。

しかしながら、自己との和解とはまさしく、ユダヤ人との協和に際して近代が頑冥に拒んだところのものであるのだが。

創世記には次のような物語がある。それによれば、アブラハムの妻であるサラは、アブラハムとハガルのあいだの息子であるイシュマエルを追放するように訴えた。

そしてアブラハムは、次の朝早く起き、パンと水の革袋を取ってハガルに与え、背中に負わせて子供を連れ去らせた。……革袋の水が無くなると、彼女は子供を一本の灌木の下に寝かせ、「わたしは子供が死ぬのを見るのは忍びない」と言って、矢の届くほど離れ、子供の方を向いて座り込んだ。彼女は子供の方を向いて座ると、声をあげて泣いた。神は子供の泣き声を聞かれ、ハガルに呼びかけて言った。「立って行って、あの子を抱き上げ、お前の腕でしっかり抱き締めてやりなさい。わたしは、必ずあの子を大きな国民とする」。神がハガルの目を開かれたので、彼女は水のある井戸を見つけた。彼女は行って革袋に水を満たし、子供に飲ませた (Genesis 21 : 13-20)。

これらの節を注解する際に、古代のラビは次のように語っている。すなわち、天使はそれを見たときに、不満を抱いた。そして天使は、どういうわけで後にイスラエルに災いをもたらすように運命づけられた者に、水を与えたりしたのかと神に尋ねた。それに対して、神は次のように答えたと推測される。すなわち、神は万人を、現にどういう者であるのかということに裁くのであって、どういう者になるのかということに裁くのではないと。

訳者：上原潔（同志社大学大学院神学研究科）

## 注

- 1) この問題系の全体像に関しては、本稿では簡略的にしか扱うことができない。以下の文献を参照のこと。Esther Benbassa and Jean-Christophe Attias, *The Jew and the Other*, translated from the French by G. M. Goshgarian, Ithaca (Cornell University Press, 2004).
- 2) Jean-Paul Sartre, *Portrait of the Anti-Semite*, trans. Erik de Mauny (London: Secker and Warburg, Lindsay Drummond, 1948), p. 51.
- 3) *Ibid.*
- 4) *Ibid.*, p. 52.
- 5) *Ibid.*, p. 120.
- 6) これは、「シャツバートのための非ユダヤ教徒」に相当するイディッシュ語である。
- 7) ミムナは北アメリカのユダヤ人が祝う賀春であり豊饒の祭りである。それは過ぎ越しの祭りの最終日の夕暮れに始まり、翌日まで続く。